

## “International Women’s Day” 100 周年記念によせて—“International solidarity is needed for international women’s day”

南コニー

### はじめに：「国際女性の日」の制定

1904年3月8日ニューヨーク市で女性労働者たちによる大規模なデモ行進が決行された。彼女たちが訴えたのは、長い労働時間及び低賃金の改善と、社会的地位の向上をはかる婦人参政権の付与であった。この運動の波を受け、1910年、コペンハーゲンでの国際社会主義者会議でドイツの社会主義者クララ・ツェトキン（Clara Zetkin）によって提唱されたのが「国際女性の日」である。この会議でツェトキンは、国際女性の日提唱と共に、それまでごく一部のきわめて少数の裕福な納税者にだけ認められていた女性の選挙権が、すべての女性に平等に与えられなければならない権利であると強く主張した。その翌年、この「国際女性の日」と参政権獲得の運動は、デンマーク、ドイツ、オーストリア、スイスに伝わり、1913年の3月8日には西欧各地で平和を訴える女性集会が開かれた。その結果、デンマークやアイスランドでは、1915年に婦人参政権が認められ、1917年にはソ連、その翌年にはドイツとカナダ、そして1945年にフランスと日本においても認められた。その後1975年に3月8日を「国際女性の日」とすることが国連によって正式に定められ、毎年、世界各国で、女性の権利を見直す集会やこの日を記念するさまざまなイベントが催されている。

### 2010年コペンハーゲン国際女性会議レポート

1910年から100年後の2010年3月8日、ツェトキンの言葉を引用した挨拶でコペンハーゲン国際女性会議100周年記念の幕が開かれた。プログラムの構成は、現代の若いフェミニストたちによるパネルディスカッション、1950年代以降の女性活動家や各界著名人によるスピーチ、トークセッションや映画の上映など、フェミニストの世代間交流に基づいたオープンな会議であった。

まず、最初のパネルディスカッションでは、メディアの一端における活動をテーマとして、現代の欧米のフェミニストたちの活躍の紹介と質疑応答があった。パネリストは、フェミニズムを扱うドイツの雑誌『ウィア・フラウン（Wir Frauen）』の編集者ミツ・サンヤル（Mithu Sanyal）<sup>1</sup>、アメリカの“Feministing.com”の編集者ジェシカ・ヴァレンティ（Jessica Valenti）そしてスウェーデンのフェミニスト作家ヨハンナ・パルムストロム（Johanna Palmström）<sup>2</sup>であった。

**Q1.** この半世紀の間に女性の社会的立場はかなり改善されてきたように思われるが、2010年の今日においても「フェミニズム」の運動は必要なのか？

サンヤルー必要である。フェミニズムの重要性は、今日のこの日が、ただ単に「女性の日」というのではなく、「『国際』女性の日」といわれるところにある。つまり、グローバルな視点からみると、まだまだ女性の基本的人権が守られていない地域がたくさんあるということである。もちろん、21世の今日では70年代と異なり、欧米を中心に多くの事柄が改善され、当時と同じようにこの運動に賛同してもらうのは難しいが、世界への一つのチャレンジとして、エネルギーとして大事な運動であると思われる。

ヴァレンティー「傘をさして歩き、たとえ自分が濡れなかったとしても、外で雨が降っていないとはいえない」のと同じように、世界中で女性差別に関する問題がありつづける限り、フェミニズムには必要性がある。そして、今日のフェミニズムで重要なことは、ウェブサイトなどを利用して、多様になったフェミニズムの「プラットフォーム」をつくることである。

パルムストロム—どうして、女性の社会進出で知られているスウェーデンのような国でフェミニズムが必要なのか、ということをよく問われる。確かに私の母国スウェーデンは、男女平等で知られた国であり、ジェンダーギャップが最も少ない国であったが、現在はその第一世代が後退し、フィンランドやアイスランドなど他の北欧諸国に次ぐ女性の進出国となっている。今後の男女平等の明確なガイドラインを生み出すためにも継続的なフェミニズムのエネルギーが重要である。

**Q2.** 現代のフェミニズムは1970年代と比べてどう違うのか？

ヴァレンティー—1970年代のフェミニズムは、欧米を中心に現実の生活に焦点があてられ、特に女性のフィジカル面での運動が中心であった。その当時は、女性の社会的地位、家事労働、性の解放がフェミニズムの基盤であった。つまりフェミニズムは公共を通して個人へと伝わっていった運動であったが、現在のフェミニズムでは、個々人のオンライン活動から、インターネットを中心に情報が流され、フェミニズムの運動がよりグローバルな視点で議論されている。つまり、現代のフェミニズムは公共から個人への一方通行ではなく、個人から発信され、学校や仕事場など公共に伝播する運動となり、現実生活の改善につながっているのだ。

### Q3. インターネットから広がるフェミニズム運動と主要メディアとの関連性はあるのか？

サンヤルインターネットのサイトに掲載した記事と同様のものを、主要メディアにも送り続けることで、TVや主要メディアに取り上げられるケースがある。

パルムストロム—主要メディアでは、それぞれのニュースを重要視するもののジャーナリストの見識が狭かったり、古い固定観念にとらわれた捉え方をしたりすることが多く、問題の結論に導くようなインスピレーションある記事が書かれることは少ない。よってサイトから主要メディアへの関連性はいまだに希薄だといえる。

### Q4. フェミニズムはどのようにメディアや各組織に影響を与えているのか？

パルムストロム—フェミニズムは法の改正につながる運動である。そのためフェミニズムを文化交流や学会のレベルにとどめるのではなく、政治につなげる具体策が生み出されなければならない。フェミニズムの運動は、その運動とともに起こる人々の「賛同的な余波」で、これまで見過ごされてきた諸問題を顕在化させる効果がある。21世紀に入ってフェミニズムは、階級、人種、民族にまで対象を広げた社会的活動となっている。例えばスウェーデンでは2009年、これまで使用されてきた「処女膜」という言葉の代わりに「膣粘膜」という言葉の採用が決定された。

パルムストロムが述べる、スウェーデンのこのような事例は、ことばの背景を再考し、現代に適応した意味を当てなおすことで、既存の意味作用に含まれる古い価値観を脱構築することに意義がある。もともと、スウェーデン語では処女膜のことを“mödomshinna”と言ってきたが、この言葉には、女性の処女性が結婚によって壊されるべきものであるという意味が込められている。しかし、現在の医学的見地から、女性の粘膜が変化をしつつも生涯を通じて女性の身体の一部であり続けることから、「膣粘膜」“slidkrans”という言葉に置き換えられたのである。これまで使用されてきた“mödomshinna”という言葉には、長い間女性の性を「純潔」と「罪」に二分し、女性の身体を社会的に支配してきた歴史があり、このような言葉から生まれる女性の「性の拘束」はスウェーデン人や同国に住む移民たちばかりではなく、今でも世界の多くの国々でみられることである。極端な場合は、この言葉の神話性によって女性の処女が財産として捉えられ、男性によって所有されるべきものと認められることで女性自身の身体に対する決定権が奪われ、隷属的な生き方を強いられる場合もある。このような性的アパルトヘイ

トにつながる既存の概念を排除すべく、今回は新たなことばが採用されることになったのだという。新しく採用された言葉は、英語、アラビア語、クルド語に翻訳され、パンフレットとして国内で配布しており、今後は広く海外へと頒布することも検討されている。

会議のプログラムで次に発表をしたのは、デンマークの男女共同参画大臣兼環境エネルギー大臣のリュケ・フリース (Lykke Friis)<sup>3</sup> である。演説の冒頭で彼女は、フェミニストたちが男性の参加なしに男女平等に達することはないと結論付け、ジェンダー問題に関する男性の積極的な参加を呼び掛けた。また女性の社会参加によってスウェーデンでは GDP が 27% も上がった経緯があり、女性の能力は社会的に活かされるべきで、失うわけにはいかないものだと言った。

100 年前、ツェトキン は国際女性会議において、同じ義務が同じ権利を要求するという事実によってだけではなく、女性の能力を公私の環境でフルに活用させないことは、民主主義の名において犯罪的であるとし、男女の平等、雇用機会均等を提唱したが、フリースの演説はまさにこの内容を彷彿とさせるものであった。彼女は今後の男女平等への抱負を語ると共に、ツェトキンに代表される先行社会のフェミニストたちの活動によって、2010 年現在のデンマークでは、政治など、国の重要事項を決めるポストに女性が就いている事実を喜ばしいこととして讃えた。

次の発表はアイスランドの第 4 代大統領を務めたヴィグディス・フィンボガドッティル (Vigdís Finnbogadóttir) によるものであった。彼女は民主主義選挙で選ばれた世界初の女性大統領として知られている。演説の冒頭では、先のフリースの演説内容を受け、アイスランドの有名な諺、「足跡はすぐに雪にかき消される」という言葉を紹介し、先行社会におけるフェミニストたちの活動がいかに重要であり、忘れてはならないものかということとを彼女自身の経験に基づいて語った。

フィンボガドッティル—1975 年、私を含めて約 25000 人の女性 (女性 5 人に 1 人の割合) がアイスランドでストライキを起こした。本来ならば定時まで働かないといけないうところを、女性労働者たちと申し合わせて、一斉に 14 時 08 分ちょうどに仕事を中断して帰宅したのだ。なぜ 14 時 08 分だったのか？それは、その当時女性が男性と同じ仕事に就いていても、男性の給与の 64.8% しか受け取れないことに対するあからさまな抗議であり、この就労時間の切り上げは女性労働者たちの間で事前に綿密に計算されたものだった。男性と女性の間の賃金と労働時間の不平等を訴えるために、私たちは男性と対価の労働時間分しか働かないことで、男女の給与の平等を主張したのである。"I am not 65% of a human"、がこのときの主要スローガンであった。このストライキは男性が結婚して給与が上がる一方で、女性が結婚したり出産し

たりすることで給与が結果的に下がることに対する不平等をなくすための一致団結した運動でもあった。この一致団結した運動により、市内の銀行や郵便局の窓口から人が消え（その当時女性の一般業務は建物一階の接客業に集中しており、役員室など経営に関わる大事なオフィスはたいてい2階以上にあつて男性中心の職場だった）、あらゆる公的機関や工場などに麻痺が生じた。このときに、アイスランドは改めて女性の社会的影響力に気付き、この抗議を機に社会的な男女平等の問題が再考されることになったのである。その結果、役職を含む公共機関での女性の就労率が40%に増やされ、女性の労働市場が80%増し、1980年には女性党が発足し、アイスランド大学などの運営に関しても男女平等の理念が浸透していった。しかし、これらの成果は、残念ながら時代が変わるとともに忘れられてしまう傾向にある。時代の状況に合わせた新たな男女平等を得るためには、男性と協力して「男女平等」について新たな方向性を示していく必要がある。たとえば、この会議でも男性との自由な対話がなぜないのか？とわれわれは問わないといけな。かつて英国首相のサッチャーは、何事かを企てたいときは男性に訊き、何事かを成し遂げたいときは女性に訊け、と言ったが、これは男性の決断力と、女性の実行力でもって、はじめて物事が達成されうするという意味である。そのことに伴い、今後は女性が豊かさの源であるということをグローバルな視野で捉えられなければならないだろう。“Gold mine, women are” この言葉をいつも胸にこれからの女性の進出に期待している。

続いてナワル・エルサダヴィー（Nawal El-Saadawi）とナオミ・ウルフ（Naomi Wolf）<sup>4</sup>によるパネルセッションである。エルサダヴィーは、エジプト出身の人権活動家、産婦人科医であり、FGM（女性器切除）廃止運動に関する活動や多数の著書で著名なフェミニストであり、ウルフは、アメリカ合衆国において長年、ビル・クリントン、アール・ゴア氏の政治コンサルタントを務めてきた作家である。

エルサダヴィー—いまだ植民地主義的な言語でもって物事が語られている以上、我々はその鎖から解放されていない事実を知らなければならない。たとえば、わたしはエジプト出身だというと、すでに「第三世界」というカテゴリーの中に組み込まれ、場所は「中東」というふうに定義づけられている。一つしか存在しないはずの世界で、「第三世界の真ん中の東」という場所は本当に存在するのか、あるいは私たちの思考の中で構成されてきた世界なのか。たとえば、私がロンドンに公演に行くとき、「北に行ってくる（I am going to the North）」とか、アメリカに行くときに「極西に行ってくる（I am going to the Far West）」と人々に告げると必ずといって良いほど笑いが起きる（会場でも笑いが起こる）。しかし、「私は中東からきました（I come from the Middle East）」あるいは、「会議で極東に行ってきます（I am going to the Far

East for the conference)」と言うと、人々は何の反応も見せずに、当たり前のように私の言葉を受け入れる（会場が静まりかえる）。私自身が「第三世界の真ん中の東」で暮らしていると感じたことがないように、人はそれぞれ自分の地理的基準をもとに考えて暮らし、生きているのだと思う。しかし残念なことに、私の住んでいるエジプトでも植民地時代の言語はそのまま使われ、地理に基づけば、“The North”である欧州を、“The West”と位置付けている。双方がこのような言語の使用を見直さない限り、「グローカル（Glocal）」な協力は生まれまいだろう。

ここでエルサダヴィーのいう“Glocal”とは、“Global”と“Local”を組み合わせた造語である。この言葉の背景には、「グローバル」と「ローカル」の両方の協力が統合されてこそ、人間の平等、男女の平等が成立するという理念がある。また彼女は、現在欧州の移民の間で問題となっているヘッドスカーフ、ニカブ、ブルカの着用に対して反対意見を述べると共に、現在一般的になっている女性の「化粧」についても言及した。彼女によると、女性のヘッドスカーフも化粧もある種の社会的規範が働いており、その暗黙の了解の背景には男性による女性の社会的拘束性がみられるという。このような背景から、男女平等の進展に関して彼女は、『われわれは、お互いに学ばなければならない』という言葉をよく聞くが、まずお互いから学ぶためには、お互いが対等のステージにいることが前提である」と述べた。

エルサダヴィーが今日のフェミニズムの活動の在り方について語った姿勢に対し、ウルフは以下のように付け加えた。

ウルフフェミニズム自体は、もう分析しつくされたものであり、われわれはすでにジェンダーにおける問題を熟知しているはずなので、今や戦力的な新機軸、政治的意欲、機構が必要なものだけである。われわれは、会議や学会においてジェンダーの問題を批判し、議論し終えたあとに柔和に落ち着いてしまうのではなく、政治的解決策までもっていかなければならない。思考から行動、そして具体的政策への直結させるには、会議において論議された問題や結論を法律に移行し、そのためにかかる時間やコストまでその会議において明確に算出しなければならない。また、ジェンダーの問題を従来のフェミニズムから前進させ、さまざまな分野の境界線をまたぐ社会的問題として扱うためには、世界中のジャーナリストと連盟を結ぶことが重要である。

ウルフの発言にエルサダヴィーも賛同し、会場から二人に拍手が送られた。

二人のセッションの次は、現在活躍している女性の起業家によるスピーチで、演題は「才能

あるより多くの女性をいかにして社会の中に結集させるか」という、ビジネス・マネジメント論と女性の将来性についての展望であった。ノルウェーの女性専門の人材派遣会社 Female Future の CEO、ベンヤ・ファガランド（Benja Fagerland）は、女性が社会で重要なポストにつくためには、新しい価値の創造や、適正資格の定義を問いなおすことが必要であると述べた。

ファガランド—主導権は与えられるものではなく、自ら獲得するものである。たとえば、男女平等活動やフェミニズムの運動などに参加することで、女性である自分を弱者の立場として表明することになるのではないかと、という思い込みから、自分に関わるジェンダーの問題に目を閉じることは、問題を個別化するだけで何の具体的解決にもならないということを知らなければならない。より多くの女性の公的な活動が、職場におけるセクシュアルハラスメントや、パワーハラスメントなどの個人の問題の解決の糸口になることを忘れてはならない。このことを胸に、女性の積極的なビジネス参加を呼び掛けていきたい。

その他、会議のプログラムに、フンボルト大学のエバ・ヴィットーブラットストロム（Ebba Witt-Brattström）教授によるヴァージニア・ウルフと女性性の問題についての発表、デンマークの著名な作家スザンヌ・ブロッガー（Suzanne Brøgger）<sup>5</sup>による朗読、サウジアラビア初の女性監督ハイファ・アル・マンズール（Haifaa Al-Mansour）<sup>6</sup>による映画の紹介、デンマーク赤十字社所属のウズマ・アンダーセン（Uzma Andersen）及び、女性の人権を守る会所属の写真家ティナ・エングホフ（Tina Enghoff）による“Seven-Contemporary Slavement”をテーマとしたトークとセッションとフォトグラフィーのコラボレーション等があった。

その後、“International solidarity is needed for International Women’s Day”という参加者全員の結論によって2010年、コペンハーゲン王立図書館における国際女性会議の幕が閉じられた。

## おわりに

世界経済フォーラムの2010年 Gender Gap Report<sup>7</sup>によると、世界で最も男女格差の少ない国はアイスランドであり、続いて2位がフィンランド、3位がノルウェー、4位がスウェーデンである。このようなアイスランドの男女平等は、先行社会を担ってきたフェミニストたちの努力を引き継いだ、女性労働者たちの一致団結した運動の成果といえるのではないだろうか。

同レポートによると、残念ながら日本は134カ国中で94位である。これは主に、女性の雇

用機会、教育、健康、政治的役割をジェンダーギャップ指数として算出した結果である。先進国の中で最下位を占める日本が特に問題とするのは、雇用と政治的役割における女性の消極的参加である。例えば2010年のThe Corporate Gender Gap Report<sup>8</sup>によると日本女性のCEOは約4%と少なく、その理由としてあげられているのが、役職における女性規範の欠如、男性主導の文化的背景、多様なポリシーに基づく新しい実践の承認を得ることが困難であること、ネットワークと社員教育の欠如である。また結婚や出産を機に離職するケースの多さなども、女性の社会進出や役職などへの昇格を困難にさせている原因であるといえる。このようなジェンダーの問題に関しては今後、様々な議論がなされなければならないだろう。本レポートでは、2010年国際女性会議において発表された世界各国の女性活動家の今日の見解を紹介することで、ささやかではあるが、日本における男女共同参画に新たな視点が見出されることを期待したい。

## Footnotes

- <sup>1</sup> Sanyal, Mithu. (2009). *Vulva-Enthüllung des unsichtbaren Geschlechts*. Wagenbach: Berlin.
- <sup>2</sup> Palmström, Johanna. & Elf-Karlén, Moa. (2008). *Äga rum-röster ur den feministiska rörelsen*. Tiden: Stockholm.
- <sup>3</sup> リュケ・フリース (Lykke Friis)、1969年生、コペンハーゲン大学講師、国際政治博士。
- <sup>4</sup> Naomi Wolf, 主著に *The Beauty Myth*. (2002). Perennial: New York.
- <sup>5</sup> Suzanne, Brogger. (1986). *Fri os fra Kærlighden*. Rhodos: Humlebæk.
- <sup>6</sup> Haifaa Al-Mansour. (2006). *Women without Shadows*. ハイファは、サウジアラビア初の女性映画監督であるが、サウジアラビアでは映画館や劇場は不道德な場所とされており、公的に存在していないため、彼女の作品は国外で上映されている。
- <sup>7</sup> “The Global Gender Gap Report 2010”. Retrieved 29 October 2010, from <http://www.weforum.org/en/Communities/Women%20Leaders%20and%20Gender%20Parity/GenderGapNetwork/index.htm>
- <sup>8</sup> “The Corporate Gender Gap Report 2010”. Retrieved 29 October 2010, from <http://www.weforum.org/en/Communities/Women%20Leaders%20and%20Gender%20Parity/GenderGapNetwork/CorporateGenderGap/index.htm>

**The 100th Anniversary of “International Women’s Day” — “International solidarity is needed for international women’s day”**

**Connie MINAMI**

The “International Women’s Day” celebrated its 100th anniversary in 2010. The 2010 International Women’s Conference was held in Copenhagen commemorating the day proposed by female activist Clara Zetkin at the International Socialist Conference in 1910. At the conference, feminists and politicians mainly from western countries had panel discussions in which they engaged in a number of debates concerning the necessity and the problems of modern feminism. According to the Gender Gap Report at the 2010 World Economic forum, Northern Europe nations such as Iceland, Finland, Norway and Sweden rank high on the list of countries where the gap between men and women is narrow. Unfortunately, the same report shows that Japan ranked 94th out of 134 countries. These results are calculated by the gender gap index in terms of women’s employment opportunities, education, health, and political roles. Japan’s particular concern is the lacking of women’s participation in the spheres of employment and politics. In order to improve this situation, this report intends to highlight Northern European countries’ past efforts and their current attitudes in the field of gender equality. On the other hand, the 2010 Corporate Gender Gap Report indicates that only 4% of CEOs in Japan are female, a fact that is caused by lack examples of women in positions of power, the cultural background of the male hegemony, and a shortage of networks and employee training. Moreover, there are many cases in which women leave their jobs when they marry or have children. It is therefore becoming more difficult for them to advance in society or to climb to managerial post. Japan faces a large number of challenges in terms of gender issues, which cannot be separated from the traditional Japanese understanding of hierarchy, family and image of women in the public sphere. This report is aiming at opening new perspectives on gender equality in Japan by introducing current views proposed by female activists from around the world at the 2010 International Women’s Conference.

**Keywords:**

gender, gender equality, International Women’s Conference, International Women’s Day, Northern Europe